

グリーンパーク相談所だより 22号

2008年（平成20年）5月31日発行

クレマチスは「第2のバラ」 「つる性の花の女王」

初夏の日差しを吸い込むように庭の生け垣や門扉のアーチに大輪の花を咲かせるクレマチス。雷よけにもなると信じられていた花は、古代ローマ時代から住居の壁に、その長いつるをはわしていたという。しかし、今日のクレマチスと呼ばれる園芸品種の多くは、日本にも自生する原種のカザグルマや中国産のテッセンから生まれた。

19世紀前半シーボルト(ドイツ人で長崎・出島にいた医者・植物学者)が、このカザグルマをヨーロッパに紹介したのを機会に、クレマチスの世界的な園芸史が幕を開けた。以後、さまざまな交配が重ねられ、カザグルマの特徴をいかした大輪の花が続々と生まれた。

イギリスでは、「バラは花の王」に対して「クレマチスは花の女王」と呼ばれた。

クレマチスは、バラに劣らぬ豪華な大輪や、バラにはない目の覚めるような青・紫系の花色、そして多くは四季咲きで華麗なる色彩の競演が長く楽しめる由縁である。



テッセンとカザグルマ

クレマチスの原種である日本産のカザグルマに対して、テッセンは中国産でありむしろクレマチスの代名詞のように扱われている。さしずめカザグルマは身近な花なら、テッセンはさしずめ気品のある花といえよう。

カザグルマ

大輪で8弁花、名前の由来はおもちゃの風車に似ていることから。日本（秋田県以南から九州）・朝鮮半島・中国に自生し、クレマチスの園芸品種の原種になり5～6月ごろ淡紫色ないし白色の美しい花を咲かせる。

テッセン

中輪で白い6弁花。つるが鉄のように硬く細いので「鉄線」の名が冠された。この花が中国から渡来したのは江戸時代初期とみられ、整った花形といい白と紫の上品な色合いはじつに日本人好みの花。

テッセンは渡来後瞬く間に観賞用として広く普及していった。江戸時代の寺院の襖絵にはテッセンを描いた花鳥画、さらに伊万里などの焼き物から蒔絵の類、能装束や着物の模様までしばしばその姿が描かれた。このように、中国産のテッセンは江戸の美を代表する名花として、日本人に深く愛されてきたのである。